

**春日部福音自由教会 2021年6月20日 11:00 3会堂合同礼拝（同時配信オンライン合同礼拝）**  
**聖書 新約聖書 マルコによる福音書 12章 1節～12節**  
**説教 「父からの最後の使者」 小野信一師**

2021年6月20日、主の日の礼拝を三会堂の合同礼拝としてささげております。

今まで合同礼拝をするときは、この中央会堂にそれぞれの会堂から集まって、三会堂、四会堂から集まって一緒に礼拝をしていましたが、今はこの中央会堂最大で50名としていますので、中央と丘の上と庄和の三か所に集まって、また家に留まって、礼拝を捧げている方も含めての、合同礼拝となっています。なかなか顔を合わせるできないことは残念なことでもありますけれども、しかしこのようにオンラインも含めて繋がり集まっていること、そちらにあるカメラやマイクを通して、色々な機材やインターネットを通して、皆さんのところに届いていることを信じつつ、ともに礼拝をささげています。みことばに耳を傾けてまいりましょう。もう一度お祈りをささげます。

天の父なる神さま、今私たちはともにあなたの前に出ております。今みことばが朗読されました。イエス様ご自身が、地上におられる時にお話ししてくださったたとえ話です。この大事なみことばを通して神さま、あなたのお心を私たちに教えてください。そして聖書のこと、また神さまのご計画のことが、私たちによくわかるようにどうぞ助けてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。

今日は合同礼拝で JY も一緒です。中高生たちも一緒に礼拝をささげています。ここから顔が見える中高生もいますし、見えないところにもいるかな、と思いながらここに立っています。また青年たちもいることでしょう。午後にはボウリングをするということになっています。今日は、中央、丘の上、庄和の三会堂で集まったのオンラインです。家に留まる方もいます。なおですね、かなりの期間、1年以上が経っていますけれども、同時配信をはじめてから家に留まって礼拝をささげることが多くなっている方もいらっしゃいます。なんとかしてですね、毎週でなくても、1か月に1度でも、皆さんに礼拝堂に来ていただいて、兄妹姉妹がお互いの顔を見で礼拝ができるようにしたいと願っています。また最近聞くのですが、家で礼拝している方の中で、「スマートフォンの小さい画面で見えています」という方がたくさんいらっしゃるようです。もし可能ならば、何とかして世代を超えて助け合ってくださいね、たとえばスマホやパソコンを家のテレビにつなぐ、みたいな形でですね、大きな画面で聴きやすい音で、見てもらえるようになればいいな、とずっと考えているのですが、なかなかできませんけれども、若い世代の皆さん、礼拝の YouTube を見るために、スマホをテレビにつないで、大きな画面と大きな音で見るために、どういったらできるか、先輩たちを助けてもらえないでしょうか。協力し合えればと思います。また先輩たちには、若い人たちのために、自分たちに何ができるだろうと考えて、できることをそれぞれがお互いのために試みて、やってみていければと思っています。

**1 イエス様のことばをよく聞くと、聖書全体、神のご計画全体がわかってくる**

さて今日のみことばですけれども、これはクリスマスに読んでも良いと思います。また受難週とか、復活祭に読まれても良いみことばであろうと思います。大事なことをイエス様がお話ししてくださったところだなと思います。

教えられることの一つは、イエス様の言葉をよく聞くと、聖書全体のことが分かるということです。神のご計画の全体がわかってくるということなのですね。特に今日の箇所もそのひとつですけれど、イエス様のお話をよく聞いていきますと、旧約聖書が、この1000ページ以上ある旧約聖書が、全体として何を伝えているのか、大事なポイント、大事な流れがわかります。

今日の箇所と別の話ですけど、「新約聖書の中に旧約聖書の戒めがたくさんありますけど、どれが一番大切ですか」という質問が出てくるところがあります。マタイにもマルコにもルカにも出てきます。その中で「二つのことが大事ですよ。その二つを実行したら全部を実行したことになりますよ」という戒めがあるのですよね。旧約聖書は1300ページもありますが、二つのことをもし人間が行うことが出来たなら、その聖書全体を行ったことになる、というのです。その二つのうち一つとは「あなたの神である主を愛しなさい」ということです。「神を愛しなさい、あなたの心を尽くして、思いを尽くして、つまりあなたの持っている全力で、全存在で、神を愛しなさい」ということ、それが一つ、これが第一です。「第二も同じように大事です」と言って、イエス様は「あなたの隣人を愛する」ということ、「あなたが自分を愛するように、隣人を愛することです」と言われました。その二つをもしするならば、全部をしたことになる。旧約聖書千何百ページの全体全部を十分にはわからなかったとしても、大事なポイントをつかめば、ここをつかんでいけば大丈夫なのだ、というのが分かるようになるのですね。ポイントと流れをつかむってことは大事なことだろうと思います。

前にも少しお話ししたことがありますけど、今日ここに本を持ってきました。今日は2冊の本を持ってきたんですけど、一つは前にも紹介したと思います。『聖書六十六巻を貫く一つの物語』（鎌野直人著、いのちのことば社）という本です。副題として「神の壮大な計画」と書いてあります。で、もう一冊本を持ってきました。これは絵本なんですけど、『せかいは新しくなる』（日本聖書協会）っていう絵本です。まさに絵があって、短い言葉がある、そういう本ですが、この本の中に、この絵本が紹介されています。「聖書を5分で理解できる絵本があります」と言って、この『せかいは新しくなる』という絵本が紹介されているのですね。

この本は、今日礼拝堂にふれサンの時まで置いておこうと思いますので、よければ後でご覧になりたい方はご覧になってください。

聖書は2000ページ近くありますけれども、この本では、聖書は全6幕からなる舞台のようだっていうのですね。第1幕から第2幕、第3幕、そして第6幕まで続いていく舞台のようなものだ、と。

第1幕は創造です。神さまがこの宇宙を何も無いところから造られた、第1幕。第6幕は新しい創造です。そして私たちが今どこにいるかということ、第5幕にいるというのですね。第4幕がイエス

で、第5幕が教会。今私たちは第5幕にいて、第6幕がこれからはじまる、これからやってくる第6幕。それを待ちながら、今この世界を生きているということなのだ、ということです。

## 2 【ぶどう園のたとえ】からは、旧約聖書の流れからの、イエス様登場の流れが見える

今日のみことばに戻りましょう。このマルコ12章のイエス様のたとえ話は、【ぶどう園のたとえ】と呼ばれたり【邪悪な農夫たちのたとえ】と呼ばれたりします。「ぶどう園の話」です。

これは、旧約聖書の流れがあり、そこからイエス様登場という新約聖書への流れを見せてくれる物語であるといっても良いでしょう。さっきの6幕で言えば、最初に創造があって、それから墮落、再創造があって、それからイスラエル、神の民の歴史があります。それが旧約聖書の歴史ですね。神の民イスラエルを、神さまが選んで用いようとした、自分の器として、代理人として、祝福を世界の人々に届ける器として用いようとした、ということが書いてあります。しかしその第3幕イスラエルの歴史から、第4幕イエス様、新約聖書。旧約聖書から新約聖書にどういふふうの流れてきたかということが、よく分かるたとえ話であろうと思います。

この今日のたとえ話を何度もよく読んで、「よくわかっていますよ」っていう人もいるでしょうし、もしかしたら「初めて聞いた、初めて読んだ」という人もいるかもしれません。後でもう1回ゆっくり読んでみたいと思いますが、まず今日のみことばは「ぶどう園の話」です。ぶどう園の主人が、ぶどう畑を作っていく話なのですが、これは旧約聖書の神さまが、イスラエルの民をぶどうの木として植えて一生懸命に世話をし、そして良い実がなるのを待ち望んでいた、ということにあてはめて語っていると理解してよいでしょう。

先ほど聖書の交読をしました。イザヤ書5章でしたね。ぶどう畑について。「わが愛する者は、ぶどう畑を持っていた。彼はそこを掘り起こして、石を除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、その中にぶどうの踏み場まで掘り、ぶどうがなるのを心待ちにしていた。ところが、酸いぶどうができてしまった」。酸っぱいぶどうになってしまったのです。甘い実がなるのを待っていたのに。神さまはご自分の民イスラエルを選んで、ぶどうの木として植えて、土を掘り起こし、石を取り除き、よいぶどうの種を植えて、そして垣根をめぐらして、野生動物や泥棒に取られないように垣根をめぐらし、踏み場を掘った。踏み場とか搾り場っていうのは、ぶどうが実った時に、その穴の中に入れて踏むわけですね。そしてぶどうの実を潰して、そこから発酵させて、ぶどう酒になっていくわけですが、そのぶどう酒を作るプロセスの中に使う道具であり、場所です。踏み場を掘り、見張りやぐらを立てて、いつでも見守っている人がいるように、人も配置してですね、建物を建てて、そして世話をしたということです。これはまさに、神さまの方が人のために、心を尽くして力を尽くして愛してくれた。先ほど「心を尽くして、思いを尽くして、神を愛しなさい」というそれが第一の戒めですってありましたが、神さまがまず、心を尽くし力を尽くして愛してくださった、世話をし、働いて、良い実がなるのを待っていてくださった、ということです。

しかし旧約聖書ではそうならなかった。残念ながら甘いぶどうの実にならずに、イスラエルの民、旧約聖書の王国は分裂して行きますが、北イスラエル王国も南ユダ王国も腐っていて、悪いものになり、食べられないぶどうになってしまった、というのです。

そういう中で、神さまの思いが、しばしばぶどうとの関わりの中でできます。たとえばエレミヤ書の8章13節には「わたしは彼らを刈り入れたい」。「わたしは刈り入れたいのだ、取り入れたいのだ」という神さまの思い、これ、神さまの心の叫びだと言っていいと思うのですが、そういう言葉も出てきています。そういう旧約聖書の流れがあったということ、きつと話をしているイエス様も、聞いている律法学者たちも、同じイザヤ書を思い浮かべたり、同じ旧約聖書のぶどう園のことを思い浮かべたりしながら、聞いていただろうと思います。

そこでイエス様が話したこのたとえ話は、農園主と、それをあずかって働く農夫たちの物語です。神さまはしきりに語りかけ、働きかけます。何度も働きかけます。今日いくつか旧約聖書と新約聖書を一緒に読みたいと思います。

全部は読めないの、これは後で読んでみてください。エレミヤ書7章13節。しきりに話しかけたということですね。

次にこれは開きたいと思うのですが、新約聖書の終わりの方、ヘブル人への手紙1章です。一番はじめ1章1節。それから後で2節にも触れたいと思います。ヘブル1章1節。「神は昔、預言者たちによって、多くの部分に分け、多くの方法で先祖たちに語られました」とあります。神さまは何度も、何人もしもべを遣わし、預言者たちを遣わして語りかけ、働きかけたというのです。

マルコのたとえ話に戻りますと 農園の主人が収穫の時が来たので遣わしたしもべを、農夫たちは辱めて捕らえて打ち叩いて、何も持たせないで空っぽの手で送り返しました。次に別のしもべを遣わしましたけれども、農夫たちはその頭を殴り辱めた。さらにまた別のしもべを殺してしまった。そういうことが続いた、と書いてあります。最後にどうしたか。このぶどう園の主人は「私には愛する息子がいる。私の息子、愛する息子を送ろう」と思われた。そう言ったというのです。このところから、ヘブル人への手紙1章2節の言葉、そしてヨハネの3章16節のみことばを思い起こします。ヘブル人への手紙、先ほどの続きですね。「多くの方法で先祖たちに語られましたが」の後ですが、2節「この終わりの時には、御子にあって私たちに語られました」。終わりに、最後に、「御子によって神さまは語られた」というのです。このたとえ話を読んで、これが旧約聖書の何百年の流れはこういう感じだったのだなということをイメージしつつ、ヨハネ3章16節を読んでみたいと思います。中高生も青年も大人の皆さんも、多くの方が覚えているのではないかと思います。このマルコの12章のたとえ話の流れを思いながら、改めてヨハネ3章16節を、と思います。

先にもう1回、マルコの12章1節の途中、カギカッコのところから8節までのイエス様が語られたたとえ話をもう一度読みたいと思います。みんなで読みましょう、と言いたいところですが、今集まった場所で声を出すのは最小限にしていますので、私が読ませていただきます。家に一人でいる方は一緒に読んでくださって結構です。

「ある人がぶどう園を造った。垣根を巡らし、踏み場を掘り、見張りやぐらを建て、それを農夫たちに貸して旅に出た。収穫の時になったので、ぶどう園の収穫の一部を受け取るため、農夫たちのところにしもべを遣わした。ところが、彼らはそのしもべを捕らえて打ちたたき、何も持たせないで送り返した。そこで、主人は再び別のしもべを遣わしたが、農夫たちはその頭を殴り、辱めた。また別のしもべを遣わしたが、これを殺してしまった。さらに、多くのしもべを遣わしたが、打ちたたいたり、殺したりした。しかし、主人にはもう一人、愛する息子がいた。彼は『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に、息子を彼らのところに遣わした。すると、農夫たちは話し合った。『あれは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は自分たちのものになる。』そして、彼を捕らえて殺し、ぶどう園の外に投げ捨てた。」

旧約聖書の流れがそこに見えてくるように思います。ヨハネ3章16節、皆さん暗誦しているのではないかと思います。今二度か三度ですね、思い出しながら、声に出さなくていいですので、小さな声で、あるいは声に出さずに言ってみましょう。聖書を開いて読んで見ていただいても結構です。

ヨハネ3章16節。ではご一緒に。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」。もう一度お声に出さなくて良いので見てみてくださいあるいは暗誦してみてください、どうぞ。

聖書の中の聖書、ヨハネ3章16節を思いながら、もう一度このマルコのたとえ話、5節と6節だけですが読んでみます。「また別のしもべを遣わしたが、これを殺してしまった。さらに、多くのしもべを遣わしたが、打ちたたいたり、殺したりした。しかし、主人にはもう一人、愛する息子がいた。彼は『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に、息子を彼らのところに遣わした。」

つながりが見えてくるように思います。旧約聖書と新約聖書に。そして流れがつかめてきます。聖書全体の。旧約聖書の歴史で、神が何をしておられたか、人がそれに対してどう応答したか、しなかったか、そしてその最後に神が何をされたのか、誰を遣わしたのかを、ギュッとまとめて、イエス様が物語ってくださった。旧約聖書から新約聖書のイエス様の登場の流れを、ギュッとまとめてイエス様が物語ってくださったのです。イザヤのみことば、エレミヤのみことば、そしてヨハネの15章で、「わたしはまことのぶどうの木です。あなたがたは枝です」と言った。旧約聖書の神が期待されたぶどうの木が、期待のようにならなかった。そのことも踏まえながら、イエス様がまことのぶどうの木として来られた。旧約聖書と新約聖書がそのようにつながっていきます。

### **3 【邪悪な農夫たちのたとえ】は、他人事ではない**

さてこのたとえ、【ぶどう園のたとえ】と言いましたけれども、もうひとつの呼び方は、【邪悪な農夫たちのたとえ】という呼び方ですね。悪い人たち、主人の下で働くけどダメな人たち、邪悪な者たち、【邪悪な農夫たちのたとえ】話だというふうに言うわけです。ですからこの話を聞いているとですね、「なんと酷い農夫たちだろうか、主人に対して反抗的で、して当然のことをしないなんてひどい」と思うのです。でもですね、そこでまた思われます。「あの人たちはひどい、なんてわかってない奴

らなのだ」というふうに、他人ごととして人を指さしてはいられないということです。これもまた自分たちのこと、特に神の民、すなわち教会のリーダーや奉仕者にとっては、他人ごととして人を非難している場合ではなく、自分のこととして受け止めなければならないことです。

このたとえ話には、〈神の民のリーダーや奉仕者は、誰の畑で、誰の利益や収穫のために働くのか〉という問題が示されています。イエス様の当時は、民のリーダーというのは、その前の27節に出てきます「祭司長たち、律法学者たち、長老たち」という人たちでした。彼らは12節で、このたとえが自分たちを指して語られたと気がつくわけですね。今の時代はですね、「神の民」というのは、すなわち「イエス・キリストの教会」のことです。全世界にイエス・キリストを信じる、イエス・キリストに繋がる人たちがいる、その集まりがある。それが教会です。神の民、すなわち教会のリーダーあるいは奉仕者というのが、まず牧師であり執事でありその他の教師であったり奉仕者であったり、そしてまたすべてのキリスト者が奉仕者であります。その人たちに問われるのです。誰の畑で、誰の益のために、誰の収穫のために働くのかということが問われます。「ぶどう園は誰のものか？収穫は誰のものか？」を忘れてしまってですね、7節にあるように、財産を自分たちのものにしてしまおうと考えると、私たちもこの農夫と同じになります。「自分が何かを得るため」になっていないかが問われます。

究極的にはぶどう園、この土地を、相続財産を、「自分のものにしよう」とする過ち、これが罪の究極、極みです。神のものを自分のものにする、神の畑を自分の畑に、神の利益を自分の利益にする、神の財産、王国・国土を自分のものにしようとする、それが罪です。神を無視し、神から奪い取る。そのために神も神のひとり息子も殺してよいと思ってしまう。自分が神に代わって神となろうとする。人間の過ちの究極、罪の極みです。神が農園と、この世界の持ち主であるのに、自分が神に代わって、持ち主、所有者、主人になろうとする。それが人間の愚かさです。分をわきまえない、「自分で自分のことがわからない罪」です。この【邪悪な農夫のたとえ】は、そのことを伝えています。

さて聞いていた人たち、祭司長たちは、この話は自分たちのことを話しているって分かったのですよね。12節に「気づいた」「分かった」と書いてあります。自分たちが責められていると言いますか、そう思ったのでしょうか。過ちに気付いた時どうするでしょうか。ひとつの道は、その過ちを悲しみ改める方向を変えるという道です。そのチャンスでもありました。イエス様は「チャンスをくださった」ということでもあったらと思います。しかしそこで彼らは、二つ目の道、イエスを殺そうと考える。12節には「イエスを捕えようと思ったが」と、ここにはまだ「殺す」とは書いていませんけども、すでにこの前にも「イエスを殺そう」と考えていたことが書かれています。二つ目の道、イエスを殺そうとする道を選び、そして実際ここから13章以降、イエスを殺す計画を彼らは実行していきます。

ただ、捨てられ殺されたひとり子、ひとり息子は、死んで終わりではなかった。それが新約聖書です。「家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった」。10節に詩篇118篇が引用されています。十字架と復活に向かって福音書は進んでいきます。人が捨てた石が、新しく建てられる建物の基礎となり、「これは主がなさったこと、私たちの目には不思議なことだ」。神のなさる不思議がここで

も歌われています。私たちが賛美をささげましょう。今日の賛美は2曲ともヨハネ3章16節の歌です。みことばを暗誦して口ずさみ歌いましょう。

先日『三谷種吉伝』という本とCDなどを送ってくださった方がありました。「『故郷』4番を歌わせてもらっています」というご連絡をくださったのですが、そのCDに、2曲とも歌われていました。今日歌った一曲目が三谷種吉先生の作詞で、2曲目は文語訳聖書のヨハネ3章16節のままを歌詞として歌っている曲です。

#### **4 主人は農夫たちを殺さず、代わりにひとり息子を死に渡された**

さてひとつ、ちょっと戻って、6節の言葉に注目したいと思います。主人はこう言いました。「私の息子なら敬ってくれるだろう」。このみことばを読んで皆さんどう思われるでしょうか。もうすでに自分のしもべを遣わし、二人目を遣わし、三人目を遣わして、さらに多くのしもべを遣わして、送り返されたり、殴られたり、殺されているわけですよね。でもこの主人は「私の息子なら彼らは敬ってくれるだろう」と考えています。普通は「息子なら敬ってくれる」とは思わないのじゃないでしょうか。息子を遣わし、権威をもって遣わして、力で解決するということならば、人間としては理解できます。しかしそんな危険な農夫たちのところに、【邪悪である】ともう明らかになっている農夫たちのところに大事なひとり息子を送るとは、「どれだけお人好しなのだろう」と思われるような行動だと言ってもよいでしょう。普通ではない、あり得ないくらいの信頼を、この主人は農夫たちに持っています。「息子なら彼らはリスペクトしてくれるだろう」。イエス様は「それが父なる神さまのお心だ。あり得ないほどの愛を持ち続け、彼らは答えてくれるという信頼を持ち続けているのだ」ということを伝えておられたのだらうと思います。

しかしこの話の中で、農夫たちは跡取りの息子を殺します。相続人を殺せば、相続財産のこの農園は自分たちのものになると、愚かで邪悪なことを考えました。そしてたとえ話でイエスさまは言います。9節から。「ぶどう園の主人はどうするでしょうか。やってきて農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるでしょう」。そうして当然だということです。しかしこのたとえ話と、これから実際に起こっていく、イエス様が十字架に向かって起こっていく出来事の中には違いがあります。たとえ話のようにならなかった点があります。農夫たち、すなわち民のリーダーたちは、主人のひとり息子を殺しました。これはそのとおりになったのです。しかし主人は違います。主人は農夫を殺さず、農夫たちの代わりに息子を死に渡していた、というのが実際に起こった出来事でした。ヨハネ3章16節では「滅びることなく、永遠のいのちを持つため」と言われています。滅んで当然、殺されて死んでいった当然だった人たちを殺さない、滅ぼさない道を神さまは選ばれたということです。

「家を建てる者たちが捨てた石」。この詩篇を開きましょう。詩篇118篇、今のところは22節ですね。今この全体を読むことはできませんけれども、少し目を留めて頂きたいと思います。

あの農夫たち、また旧約聖書の神の民のリーダーたち、もしかしたら今の時代の神の民のリーダーたちも、殺され退けられて当然の存在だったかもしれません。しかし神さまは死んで当然の人たちを滅ぼさなかったのです。この詩篇118篇の17-18節にはこう歌われています。「私は死ぬことなく、かえ

って生きて 主のみわざを語りあげよう。主は私を厳しく懲らしめられた。しかし 私を死に渡されはしなかった」。死に渡されて当然の人間たちを、しかし神は結局死に渡さなかったのです。「農夫たちを殺すだろう、そうして当然だ」というたとえ話でしたが、実際には神は農夫たち、地上の人間たちを死に渡さず、むしろご自分の息子を死に渡しておられます。農夫たちが息子を殺すというひどく痛ましい出来事はその通りになります。イエス・キリストの十字架の死のことです。しかしその出来事の背後で、父なる神ご自身がひとり息子を死に渡しておられた。天の父は、人間たちや農夫たちを殺さないために、ご自分のひとり子を死に渡しておられた。だから農夫たちや人間たち、また私たちは死に渡されなくて済みます。死ぬことなく、かえって生きることができます。生きて主のみわざを語り続けることができるのです。

私たちは主の厳しい懲らしめを受けることはありますが、死に渡されることはありません。なぜならキリストが、私たちに代わって死に渡されてくださったからです。そういう不思議な不思議な方法で、神は私たち人間を、神を侮り、神の畑、農園、世界を自分のものにしようとする愚かな反逆者を、赦し救ってくださいます。中高生も青年も大人の皆さんも、ぜひ聖書の大事なポイントをつかんで欲しいと思うのです。大事な流れをつかんで欲しいと思うのです。死んで当然の者たちを、神は「死に渡したくない」と思い、救い出してくださいました。集めてくださいました。

一つとされたことを喜ぶ日であるように祈りたいと思います。中高生も青年も大人の皆さんも、もう一度心に留めましょう。聖書に私たちのことが書いてあります。誰かを指さして「あんな酷い人たちがいるよね、イエス様にいつも叱られている人たちだね」と思ってしまうのですが、私たちのことが聖書に書いてあるのです。神の驚くべき、あり得ないような真実と人間たちへの信頼。それでも愚かであり続ける人間に、罪を負わせない、死に渡さないために神さまがお考えになった方法は「ひとり子を死に渡す、ひとり子を与えてしまう」というやり方でした。そこに愛があります。そこにいのちがあること心に留めましょう。私たちはお互い罪人です。不完全で、邪悪で、愚かです。自分勝手に、神の財産を自分のものにしてしまおうとする私たちです。でも神は、そんな私たちを見捨てずに、赦す方法を用意して、バラバラの勝手な人間たちを、全く違う人たちを、ここもそうですね、年齢も性別も性格も全く違う人たちを、呼び集めて、敵意を廃棄して、一つにしてくださいさうとしています。このことを心に留めましょう。今日、青年や中高生、大人とのボウリングのひと時が、神が私たちをひとつとするため集めてくださっているということを楽しむ恵みのときとなりますように。

お祈りをささげましょう。

天の父なる神さま。御名をあげます。イエス様がたとえ話を語ってくださいまして、どんなに父なる神が真実をこめて人間を愛してくださいましたかということ、どんなに不忠実で不遜な者たちで人間があったかということを教えてくださいました。しかしなお、殺されて当然の人間たちを神は滅ぼすことを望まずに、代わりにひとり息子を死に渡すことを選んでくださいました。そこに私たちへの愛があり、そこにいのちがあることを信じます。私たちを、私たちのために死んでくださったイエス様と結びつけてください。そして私たちをお互いに一つとしてください。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン